

異文化間接触と「緩衝機能」：在日留学生の事例を通して

細 越 久美子

Intercultural Contact and 'Buffering Functions': A Case Study of Foreign Students in Japan

Kumiko HOSOGOE

The function of facilitating and mediaing differences between two cultures is important in the adjustment of foreign students because they need not only to keep their original culture but also to acquire a new host culture. In my previous studies, ten different kinds of function were identified and were named 'buffering functions' for the adjustment processes of foreign students in Japan. Each of the buffering functions works differently in four stages of time (background, preparation, beginning, and establishing stages), in three life-spheres (family, study, and friendship spheres) and in three social network patterns (monocultural, bicultural and multicultural networks). The adjustment of each foreign student depends on which network is central to the student during the preparation stage, and on which life-sphere is the most central to him/her during the establishing stage. In summary, for the buffering functions to be effective during the preparation and establishing stages, it is essential for host people (Japanese) to deal with foreign students flexibly in a variety of situations, such as promoting contact between foreign students and Japanese at the beginning of their new life, establishing support systems for the foreign students with unstable lives, allowing for some differences or difficulties foreign students have in the study sphere, and understanding each other through daily contact.

異文化間接触の過程では、自文化と受け入れ側の文化との間を何らかの形で調整・媒介する働きが存在する。特に留学生のように一定期間外国に滞在し、その後また帰国するという立場にある場合は、自文化に固執したり、あるいは受け入れ国の文化に同化してしまうのではなく、自文化を保持しつつも同時に並行して相手文化を取り入れていくことが求められるため、このような働きが特に重要となる。そこで、本研究ではこういった異文化間を調整・媒介する働きについて、在日留学生を対象にみていくことにする。

異なる文化間を調整・媒介していると考えられる事象は、異文化間接触によって生ずる諸問題への対処に関する以下のような様々な視点での研究で取り上げられている。

1. 異文化環境下で成功する人の特性に関する研究 (星野, 1980; 近藤, 1981): このような研究では共感

性や柔軟性、忍耐力、社会性などの内的諸特性が取り上げられているが、このことは異なる文化を担った人と接した場合にその個人自体が調整したり許容したりする働きを持つことが必要であることを示しているものである。

2. 異文化に対する対処能力やスキルに関する研究 (Furnham & Bochner, 1986; 山岸・井下・渡辺, 1992; 田中・藤原, 1992): 異文化適応において必要とされるものは、まさに対人関係や文化の差異を認識したり調整したりするためのスキルや対処能力であることを強調している。

3. 異文化環境における対人関係に関する研究 (Bochner, McLeod & Lin, 1977; 周, 1993): 主にソーシャル・サポートやソーシャル・ネットワークという視点の必要性が取り上げられている。ここでは、人が異文化に接触していく過程で様々な形で周囲の

人々との関わりが重要であり、またこれらの人々の側から異文化間を調整したり仲介したりする働きが必要であることを強調している。この中でも特に両文化の中間にあり、両者をつなぎ媒介する役割の重要性を強調したものには、「第三の文化 (third culture)」「媒介者 (mediating person)」（Bochner, 1982 ; Onodera, 1996）といった視点がある。

4. 異文化環境での受け入れ側のあり方に関する研究（大橋, 1991 ; 横田, 1992）：ここでは受け入れ側の持つべき態度といった個人レベルのものから、特別措置、オリエンテーションのあり方など制度的なものまで取り上げられているが、これらは受け入れ側が許容的で柔軟な働きをする必要性を強調したものといえる。

以上のように、異文化に適応する人のもつべき内的準備体制、留学生を取り巻くネットワーク、さらには受け入れ側のあり方それぞれの中に、両文化をつなぎ、調整し、差異による衝撃を和らげるといった働きが含まれている。本研究では異文化に接する個々人の内的傾向や能力、行動、対人関係、留学生関連の制度、留学生を取り巻く環境といったもののもつ、異文化間をつなぎ調整する働きや作用を包括的に「緩衝機能 (buffering functions)」¹⁾と捉え、その効果的な働きについてみていく。

細越 (1996a,b, 1997) は、先行関連研究を整理して得られた緩衝機能の分類と、実際の事例における出来事・トピックを照合し、再カテゴリー化の作業を繰り返し行った。その結果、緩衝機能を以下のように整理している。

差異に関わり調整する働き

①差異を軽減させる働き 〈例：語学力、相手文化に関する知識、ソーシャル・スキル等；「①差異軽減」と略。以下同様。〉：両文化間の差異やギャップを軽減させたり埋め合わせたりする働き。相手の文化（留学生側にとっては受け入れ側の文化、受け入れ側にとっては留学生側の文化）に自分が合わせることによって差異を小さくするようなものである。

②差異を許容する働き 〈例：個人のもつ柔軟さ、許容度等；「②差異許容」：両文化の差異を無理に狭めて共通のものにしようとするのではなく、違った文化の存在を認める働き。寛容さ、柔軟さといった個人の持つ内的特性あるいは対処能力といったものが主であ

る。例えば、考え方が全く異なっていた場合に、徹底して否定するのではなく、そういう考え方もあるのだと認める、あるいは多少日本語が上手なくても嫌がらずに熱心に聞く、などがある。

③異文化間接触を志向する働き 〈例：動機づけ、積極性等；「③接触志向」：個人が持つ異文化間接触への動機づけや積極性といったもので、このことによって異文化間の接点が生じる。

①②③を背後で支え高める働き

上記の「差異に関わり調整する働き」で述べたような、個人の持つ対処能力のようなものを身につける、あるいは高めるためになされているもので、オリエンテーションや語学学校など主に教育的側面のものが含まれる。

④隔たり感を狭める働き 〈例：日本人の知人との交流等；「④隔たり感縮小」：相手文化に対して無関係であるとか隔たったような感じを減少させ、親近感を持たせるような働き。

⑤個人の動機づけを高める働き 〈例：周囲の人からの勧め等；「⑤動機づけ昂進」：留学したい、あるいは異文化環境での経験をしたいという動機づけを高める働き。

⑥個人の対処能力を高める働き 〈例：日本語学校での教育、オリエンテーションでの情報提供等；「⑥能力昂進」：語学力や振る舞い方など、異文化環境において必要な対処能力やスキルといったものを身につけさせる働き。

両文化に介在してつなぐ働き

⑦相互接触を促進する働き 〈例：ホームステイ、国際交流イベント等；「⑦接触促進」：異なる文化を背景とする人同士の交流を促す働き。

⑧仲介・媒介する働き 〈例：通訳、英語などの共通言語等；「⑧仲介・媒介」：両文化にほとんど影響を与えずして両文化をつなぐ働き。

上記①～⑧の機能全体の背景となっている働き

⑨保護的な働き 〈例：同国人学友会や宗教上の集会等；「⑨保護」：緊張感の連続である異文化間接触から開放し、異文化間接触による衝撃を和らげる働き。

⑩基本的生活を支える働き 〈例：奨学金制度、留学生用宿舎等；「⑩生活支持」：多少のカルチャー・ショックがあっても耐えられるように生活を安定させる働き。

これらの働きは留学生の異文化間接触においてそれぞれ重要なものであるが、既に述べた関連研究や細越(1996a,b, 1997) から、その働きの有効性は一様ではないということが明らかになっている。つまり、その留学生にとってどの「生活領域」²⁾〔家庭関係領域、勉強・研究領域、私的活動領域〕が中心的か、どの「対人ネットワーク・パターン」(以下「ネットワーク」と略)³⁾〔monocultural network (同国人同士のつながり；以下「mono-net」)、bicultural network (受け入れ国の人とつながり；「bi-net」)、multicultural network (他国からの留学生とのつながり；「multi-net」)〕を利用しているか、留学生の適応段階つまり「時間的経過」⁴⁾〔留学の背景の段階、留学準備期、留学初期、留学生活確立期〕のどの段階にあるのか、によって異なった働き方を示すと考えられるのである。それぞれの「生活領域」においては特に必要とされる緩衝機能があり、家庭関係領域では⑨保護、⑩生活支持、勉強・研究領域では①差異軽減、⑥能力昂進、私的活動領域では②差異許容、⑦接触促進が該当する。さらに、こうしたそれぞれの機能は、どのような「ネットワーク」を通して行われるかによってその効果が異なってくるのである。

細越(1997)は、「生活領域」と「対人ネットワーク・パターン」の対応とそこでの緩衝機能を整理している。3つの「生活領域」と3つの「ネットワーク」との対応は、理論的には Figure 1 のように9セットが想定される。しかし、各「生活領域」で上記の緩衝機能が最

も効果的に働く「ネットワーク」には一定の組み合わせがあり、その主要なセットとして A-I (家庭関係領域における mono-net)、B-II (私的活動領域における multi-net)、C-III (勉強・研究領域における bi-net) が考えられた。

さらに、これらの主要なセットは、留学生の適応の「時間的経過」に沿って一定の展開があることが明らかになっている(細越, 1997)。入国初期においては A-I が重要であり、その後は B-II と C-III が並行して重要となってくる。B-II と C-III は同時並行的に重要となるが、それぞれのセットにおいて必要となる緩衝機能は段階的に変化する。つまり、A-I により生活の安定が満たされると、先ず B-II では②差異許容、C-III では⑥能力昂進が必要とされる主な機能となり、その後 B-II では⑦接触促進、C-III では①差異軽減が主な機能となる。このように、まず第一に生活の安定があり、次に異文化の許容された場でのスキル向上の段階があつて、さらに相互接触の場で自分自身で異文化を調整する段階へと拡張していくのである。このような展開をたどることによって、留学の目的を達成させる最も主要なセットである C-III が充実することになる。

留学生の異文化間接触の過程は、一般にこの一定の展開をたどると想定できるが、実際の個々の留学生は必ずしもこうした展開をたどるとは限らない。例えば、学業成就という所期の目的を達成できなかったり挫折したりすることにより、それ以外の私的活動領域や家庭関係領域が中心となる生活となる場合もある。もちろ

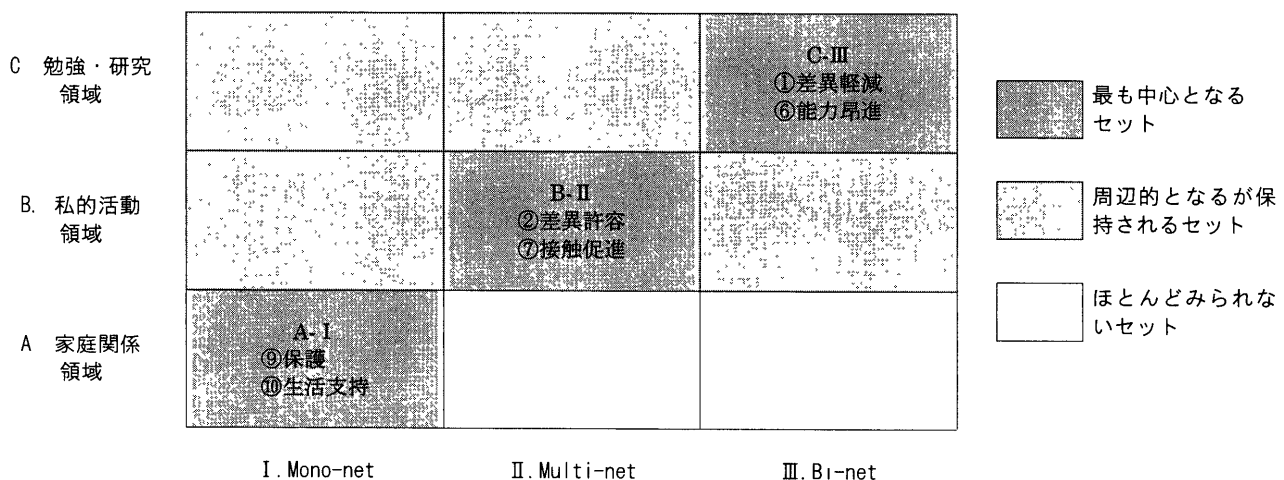


Figure 1 「生活領域」と「対人ネットワーク・パターン」の対応とそこでの緩衝機能

ん、こうした「生活領域」は留学のもう一つの目的である異文化体験にとっては意味がないわけではない。逆に学業に過剰適応することによって、こうした部分を最小限に抑えてしまうこともある。このようなことは「生活領域」「ネットワーク」「時間的経過」に対応した緩衝機能が個々の留学生の準備状況に応じて適切に働いているかどうか、ということに関わっていると考えられる。例えば、入国初期の段階で早期に A-I が確立され、そこでの緩衝機能が過剰に働くことによって、次の B-II、C-IIIへと十分に移行せずに、ほとんど全ての「生活領域」において mono-net が利用されている場合や、それとは反対に、第一の留学目的だけが先行して A-I、B-II が十分確立されずに C-III に偏ってしまう場合がある。

そこで本研究では、このような緩衝機能の効果的な働きのあり方について、「時間的経過」「生活領域」「ネットワーク」との関連で整理し、「生活領域」と「ネッ

トワーク」が一定の展開をたどることが期待されながら、留学生のおかれた状況によりそうした展開をたどることが困難となる状況を明らかにし、緩衝機能が効果的に働くための応用的施策に示唆を与えることを目的としている。

方 法

(1)調査の対象及び方法

異文化間接触研究において用いられる一般的な調査方法は、質問紙などを用いるいわゆる定量的調査と、面接法や観察法による事例を通して分析されるような定性的調査とが行われる。定量的調査と定性的調査のどちらを用いるかは、その研究の目的によって異なるが、異文化間接触研究においては言語や認識の仕方が多様である対象者に対して同じ質問紙を用いて同じように認識してもらうことが困難であるということや、異なる文化を背景とする人と人との微妙な相互作用と

Table 1 面接対象者の属性

分類	Case	性別	学部／研究科	経費	出身地域	年齢	日本留学の経歴
学部入学	母国の日本語学校出身	1 男	理科系学部	政府派遣	東南アジア	20代前半	母国の日本語学校→学部入学→卒業
		2 男	理科系学部	政府派遣	東南アジア	20代前半	母国の日本語学校→学部入学→卒業
		3 男	理科系学部	政府派遣	東南アジア	20代前半	母国の日本語学校→学部入学→中退
		4 女	理科系学部	政府派遣	東南アジア	20代前半	母国の日本語学校→学部入学
	日本の日本語学校出身	5 男	理科系学部→理科系大学院	政府派遣→私費	東南アジア	20代前半	日本の日本語学校→学部入学→大学院修士課程入学
		6 女	(他大学学部)→文科系大学院	私費→国費	東アジア	20代半ば	日本の日本語学校→4年制大学学部編入→大学院修士課程入学
		7 男	理科系学部	私費	東アジア	20代後半	日本の日本語学校→学部入学
		8 女	文科系学部	私費	東アジア	20代前半	日本の日本語学校→専門学校→学部入学
大学院入学	日本の日本語学校出身	9 女	理科系大学院	国費	南米	20代後半	日本の日本語学校→研究生→大学院修士課程入学
		10 女	文科系大学院	国費	東南アジア	30代半ば	日本の日本語学校→研究生→大学院修士課程入学
		11 男	理科系大学院	政府派遣	東南アジア	30代半ば	日本の日本語学校→研究生→大学院修士課程入学
		12 男	理科系大学院	県費→私費	東南アジア	20代前半	日本の日本語学校→大学院修士課程入学
	研究生から入学	13 男	理科系大学院	国費	中央アジア	20代後半	研究生→大学院修士課程→大学院博士課程入学
		14 男	理科系大学院	国費	アフリカ	30代前半	研究生→大学院修士課程→大学院博士課程入学
		15 男	文科系大学院	国費	中央アジア	20代後半	研究生
		16 男	理科系大学院	私費	東アジア	20代後半	研究生→大学院修士課程→修了
		17 女	文科系学部	私費	東アジア	20代半ば	研究生→中退

いった複雑な事象を対象としているため、数量化を期待した質問紙では表現されない部分がかなりあると考えられる。一方、面接法や観察法などの定性的調査は、定量的調査のこれらの問題点を補完できる柔軟性を備えている。そこで本研究では、異文化間接触という複雑な事象に柔軟に対応できる方法、つまり面接法と参与観察を用いることにした。

実際には、留学生との信頼関係を形成するため、留学生に関わる諸行事に直接参加したり留学生との日常的な接触を通して、多くの留学生およびその関係者と知り合い、その中で対象大学の留学生の全体像を反映できるように対象者を選定していった。このような参与観察を通して対象とした留学生は約45人（対象とした地方国立Ⅰ大学の留学生⁵⁾全体の約40%）、その中で集中的に面接した留学生は17人であり、本研究ではこれを直接対象とした。対象者の属性はTable 1のとおりである。尚、調査期間は1994年4月～1997年3月である。

(2)調査・分析の枠組み

1)記録・面接・観察調査の内容

- ・留学生個人⁶⁾：生活史、留学目的、経済状況、適応上の困難と対処、対人関係
- ・教育機関の側：オリエンテーションや行事、留学生担当者の対応
- ・留学生を取り巻く人々：国際交流のボランティア団体の活動状況、日本人学生の留学生との関わり方

2)分析の枠組み

1. 留学の背景となる段階から現在までの生活史を「留学背景段階」「留学準備期」「留学初期」「留学生生活確立期」に分けて整理する。
2. 各段階での適応上の問題とそれに対してなされた対処に関する事象(留学生個々人の持つ準備体制、受け入れ側の対応、両者をつなぐもの)を取り上げる。
3. 「時間的経過」に沿った「生活領域」「ネットワーク」の変遷を明らかにする。
4. 取り上げた事象を先に述べた10の緩衝機能に分類する。
5. それぞれの「生活領域」「ネットワーク」の変遷に対応して緩衝機能の効果的な働きを明らかにする。

以上のような手続きを踏み、それらの資料を先に述べた主要なセット(A-I、B-II、C-III)での緩衝機能

の働きとその時間的経過に沿った展開と比較対応して整理する。尚、事例の解釈についてはできるだけ整合性があるように心がけ、恣意的にならないよう第三者から確認をしてもらうよう努めた。また、全事例を紹介することは困難であるため、ここでは代表的な事例のみを示すことにする。

結 果

I. 「時間的経過」による「生活領域」「ネットワーク」の変遷

前述(Figure 1)の「生活領域」と「ネットワーク」のパターンを本研究の対象者について「時間的経過」に沿って当てはめると、Table 2のように整理することができる。

Table 2 から、留学全体の経過の中では、特に留学準備期における「ネットワーク」のあり方がその後の留学生活におけるネットワークの形成に深く関わっており、ネットワークから得られる緩衝機能も異なると考えられる。また留学生生活確立期に向かって「ネットワーク」と「生活領域」との対応のセットに一定の展開があることは既に示したが、Table 2 からわかるように、留学生生活の全体の過程ではこの展開を前提としながらも「生活領域」と「ネットワーク」の重要度は個々の留学生の状況によって多様性がある。つまり本来、留学生生活確立期は、勉強・研究領域が中心となり、bi-netによって支えられることになるが、私的活動領域が中心となったり家庭関係領域が中心となったり、またbi-net以外のネットワークに過度に依存する事例もでてくる。このことは、留学生の目的達成のあり方に深く関わってくる。

そこで、以下、留学準備期における「ネットワーク」の特性と緩衝機能との関連、および留学生生活確立期における中核となる「生活領域」と緩衝機能との関連の2つの側面について整理する。

II. 留学準備期における「ネットワーク」の特性と緩衝機能との関連

この時期における「ネットワーク」の形成は主として渡航(留学)の仕方に関連している。渡航の仕方は大きく(a)同国人同士の集団で留学するもの(主に政府派遣留学生)、(b)日本人の知人を通して留学するもの(主に私費留学生、大学国費留学生)、(c)特定の知人を通すのではなく、公式なルートで留学するもの(主

Table 2 各対象者の「時間的経過」による中心的な「生活領域」と「ネットワーク」の変遷

			留学 背景 段階	留学 準備 期	留学 初期	留学 生活 確立 期				留学 背景 段階	留学 準備 期	留学 初期	留学 生活 確立 期
Case 1	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 9	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
Case 2	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 10	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
Case 3	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 11	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
Case 4	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 12	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
Case 5	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 13	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
Case 6	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 14	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
Case 7	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 15	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	— — —	— — —
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	— — —	— — —
Case 8	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	Case 16	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○
	ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ●	● ● ●	● ● ●		ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●	● ● ● ●
							Case 17	生活 領域	家庭 私的 勉強	— — —	○ ○ ○	— — —	— — —
								ネット ワーク	mono multi bi	● ● ●	● ● ● ●	— — —	— — —

に国家間の国費留学生)に分けられた。さらに、この渡航の仕方の違いは(a)は mono-net、(b)は bi-net、(c)は multi-net といった中心的な「ネットワーク」の違いをもたらす。このような留学生の留学準備期における「ネットワーク」とそこでの緩衝機能の特徴は一般に以下のようにまとめられた。

(a) 同国人同士の集団で留学するもの：mono-net が中心となる。(Case 1, 2, 3, 4, 5, 8, 11)

ここで主要な働きをするのは mono-net であり、それぞれの生活領域の違いを越えて、mono-net が中心となる。Case 1, 2, 3, 4 のように同国人同士のネットワークのみのケースと Case 5, 8, 11 のように他国からの留学生と共に勉強するケースがあるが、どちらにしても mono-net が中心となる傾向があり、その内向きの働きが強いと、他のネットワークを形成するのが困難となる。主な緩衝機能は生活領域によって多少異なり、家庭関係領域、私的活動領域では比較的自文化に守られていることから⑨保護、⑩生活支持が中心となる。勉強・研究領域においても mono-net が中心となるが、この領域での主な緩衝機能は異文化がある程度許容されている場で受け入れ国の文化を学習することから、②差異許容、⑥能力昂進が中心的なものとなる。

Case 1 (東南アジア、男) 母国にある日本語学校で2年間勉強したということもあって、同国人同士のつながりが強い。何をしても一緒にあったことが、日本に来てからも継続される。日本に来たばかりの時はすでに日本で生活している同国人の先輩達にアパート探しや手続きなどを世話してもらい、次に来る後輩は自分たちが世話をすることになる。食事に行くのも遊びに行くのもほとんど同国人同士のグループで、日本人学生とは授業の時しか話をしない。

Case 11 (東南アジア、男) 日本語学校のクラスでも宿舎でも同国人ばかりなので、他国からの留学生と知り合うことはほとんどなかった。大学のある地方都市に引っ越したときは以前からそこに住んでいる同国人の先輩がアパート探しや入学手続きなどを手伝ってくれた。

(b) 日本人の知人を通して留学するもの：bi-net が形成されやすい。(Case 6, 7, 16, 17)

日本人の知り合いが様々な形で関わるので、それと

の関連で bi-net のつながりが形成されるのが特徴的である。しかし、それぞれの「生活領域」では他の場合と同様、mono-net、multi-net との関わりが中心である。

家庭関係領域では(a)と同様、mono-net が中心であるが、早期に日本人との関わりがあるので、ホームステイの形を取るなど bi-net と関わることも多い。ここでの主な緩衝機能は mono-net の場合は⑨保護、bi-net の場合は⑩生活支持である。私的活動領域においても保証人など日本人の知り合いがいることによって、学校以外での日本人との関わり合いが広がる。ここでの主な緩衝機能は受け入れ側である日本人の②差異許容、日本人と接する機会が多いことによる④隔たり感縮小、⑤動機づけ昂進、⑥能力昂進、そして日本人の知り合いによる⑦接触促進、⑧仲介・媒介といった働きがあげられる。勉強・研究領域は日本語学校や大学での日本語授業の場が主になるため、この段階では、日本人の知人がいても bi-net よりも multi-net が mono-net、類似文化圏からなるネットワークとなりやすい。この領域での主な緩衝機能は(a)と同様、②差異許容、⑥能力昂進である。

Case 6 (東アジア、女) 母国の大学で紹介された日本人の先生に日本留学を勧められ、その人の友人の家にホームステイさせてもらい、日本語学校に通う。ホストファミリーがいろいろと日本の伝統文化を教えてくれた。日本語学校では同国人だけでなく、ヨーロッパや南米からの留学生とも友達になった。

Case 7 (東アジア、男) 父親の友人(日本人)に保証人になってもらい、その人の家にホームステイさせてもらって、日本語学校に通う。その人は生活面の世話だけでなくいろいろなところに連れていってくれたり、アルバイトを紹介してくれたりした。そういった機会を通して多くの日本人とも知り合うことができた。

(c) 特定の知人を通さず公式なルートで留学するもの：multi-net が中心となる (Case 9, 10, 12, 13, 14, 15)

家庭関係領域では母国にいる家族とのつながりが重要であるが、身近にいる留学生との関わり(multi-net)やボランティア団体による支援(bi-net)を受けることもある。ここでの主な緩衝機能は mono-net では⑨保護、bi-net, multi-net では⑩生活支持である。私的活

動領域は主として mono-net 及び multi-net。勉強・研究領域での「ネットワーク」がそのまま私的活動領域での「ネットワーク」となるケースが多い。同国人がいる場合はその人と、いなければ類似言語・類似文化圏の人と親しくなりやすい。bi-net は国際交流に関するボランティア活動をしているような人に限られる傾向がある。ここでの主な緩衝機能は国際交流活動における多様な文化が許容されている②差異許容、⑦接触促進、そしてそういった交流を通しての⑥能力昂進である。勉強・研究領域は私的活動領域と同様、同国人や類似言語・類似文化圏の人と親しくなりやすい。主な緩衝機能は②差異許容、⑥能力昂進である。

Case 9 (南米、女) 日本語学校時代は学校と宿舎でいつも同じメンバーで、スペイン、チェコ、フィリピン人と親しい。買い物にいくときも勉強するときもいつも一緒だった。そのため日本に留学したという感じはなかった。

Case14 (アフリカ、男) 宿舎などの基本的な生活は大学の留学生担当者が世話をしてくれて、語学は主にボランティアによる日本語教室で学んだ。日本語教室で知り合った日本人や他国からの留学生と話すことが多い。特に英語で会話をすることのできる留学生とはコミュニケーションが容易ということもあって親しい。

このように、留学の渡航の仕方に関連して主要な「ネットワーク」が異なると共に、この段階では「生活領域」が明確には分化していないので「ネットワーク」特性によって効果的な緩衝機能が異なることになる。

III. 留学生生活確立期において中核となる「生活領域」と緩衝機能との関連

一般にそれぞれの「生活領域」と「ネットワーク」の組み合わせ（セット）は既に示したように留学準備期、留学初期、留学生生活確立期に向かって一定の展開を持って発展するといえる。しかし、留学生生活確立期のこの段階においては、留学の第一の目的であるセット C-IIIを中心としつつ、各「生活領域」と「ネットワーク」の関連は個々のケースにおいて多様である。事例としては、この段階において各「生活領域」の均衡がとれているもの (Case 5, 10, 14) と不均衡であるもの (Case 1, 3, 6, 12, 13, 16, 17) とがある。後者は、ある特定の「生活領域」が中心になり、それと同時に「ネットワーク」とそこでの緩衝機能にも偏

りが生じてくる。

【均衡がとれている事例】(Case 5, 10, 14)

ここでは A-I、B-II、C-IIIという展開をとりながら、各「生活領域」のバランスをとっているものであり、それぞれの緩衝機能が効果的に働いているものである。Case 5 はその代表的な事例であり、各「生活領域」が分化し、それぞれ緩衝機能としての役割を果たす事象が明確化していることがわかる (Table 3)。

【不均衡な事例】

(a) 家庭関係領域中心 (Case 3, 17)

留学の中心である勉強・研究領域が周辺的なものに留まることになり、留学の継続が困難になる。勉強・研究に関わる緩衝機能が十分な働きをしていない事例でもある。Case 3 はその代表的な事例であり、家庭関係領域が中心であり、その他の領域での緩衝機能がうまく働かないことから、本来の留学目的達成を断念するまでの経過がわかる (Table 4)。

(b) 私的活動領域中心 (Case 1, 6)

この場合も、留學生活の中心となる勉強・研究領域を生活の中心としないで私的活動領域を中心とした事例である。このような生活は、異文化体験の充実という側面はあるが、留学の第一の目的を達成することを困難にさせる。Case 6 はその代表的な事例であり、大学のキャンパス内での活動は周辺的になり、留学の第二の目的が先行していることがわかる (Table 5)。

(c) 勉強・研究領域中心 (Case12, 13, 16)

一般に勉強・研究領域は日本人学生が多数派であることから bi-net が中心となるが、その場に留学生がいる場合には、mono-net, multi-net が形成されやすい。しかしどの「ネットワーク」でも学業成就という目的達成のために、必要なときに必要なことだけを指導してもらおうというような表面的な関係になる傾向がある。私的活動領域がほとんどないということは、multi-net や研究室以外の日本人との関わりへの発展というものが限定され、異文化体験は形式的なもの、最小限のものとなりやすい。Case13 はその代表的な事例であり、留学の第一目的のみが先行し、行動範囲も限られ、本来の第一目的である研究・勉強も困難となっていることがわかる (Table 6)。

Table 3 Case 5（東南アジア、男）の事例と緩衝機能

	事 例	緩 衝 機 能
留学背景 段階	父親の海外出張も多く、また日本人から柔道を教わったこともあり、外国や海外留学についてそれほど隔たったような感じをもたなかった。海外留学経験をしてみたかったので、留学プログラムに申し込んだ。	この段階は④隔たり感縮小と⑤動機づけ昂進の機能が働いており、そのために本人の動機づけが高められ、③接触志向が働くことになる。
留学準備期	政府派遣による留学。オリエンテーションで基本的な日本語や日本の習慣を勉強した後、来日。東京の日本語学校に1年間通い、留学生用の宿舎に住む。日本語を上達させるため、他国からの留学生と親しくするように努めた。国際交流活動をしている日本人の人たちが困難な手続きなどを代行してくれるし、またパーティ等公式な活動以外にもドライブなどに誘ってくれたりした。日常的な日本語も学びたいと思い、料亭でアルバイトをした。	政府派遣の留学ということで基本的な生活は安定している（⑩生活支持）。集団留学のため⑨保護の機能を基盤としていながらそれに固執することなく、早期から②差異許容の場を提供し④隔たり感縮小、⑤動機づけ昂進、⑥能力昂進、⑦接触促進、⑧仲介・媒介といった働きをする国際交流活動に参加している。また、それに参加しようとする本人の側の③接触志向の働きも大きい。
留学初期	大学のある都市に引っ越したときは、以前からそこに住んでいる同国人の先輩がいろいろな手続きやアパートなどの手配してくれた。大学入学後すぐに留学生ということで珍しがられ、日本人の友達ができ、その人たちとは遊ぶだけでなく試験前に一緒に勉強もした。チューターはあまり頼りにならなかったで、相談するのをやめた。国際交流活動に積極的に参加し、日本人とも他国からの留学生とも交流を深めた。ホームステイの企画や偶然の出会いから、日本人の家族とも知り合い、生活面でのサポートをしてくれた。宗教の集会には毎週参加し、同国人だけでなく他国からの人とも知り合い、それほど親しい訳ではないが困ったときなどは互いに援助し合う。	大学入学当初はmono-netによる⑨保護、⑩生活支持が大きな役割を果たしているが、早期からbi-netあるいはmulti-netを形成し、それらが長期間持続されている。bi-net形成時には受け入れ側である日本人学生の異文化に対する②差異許容、③接触志向が働いている。本来⑥能力昂進、⑦接触促進、⑧仲介・媒介といった働きをすべきチューターがその役割を十分果たしていなかったが、その代わりにクラスメートである日本人学生によって補われていたといえる。留学準備期と同様、国際交流活動に参加し、私的活動領域においてbi-net、multi-netを広げることによって、さらに④隔たり感縮小、⑤動機づけ昂進、⑥能力昂進、⑦接触促進、⑧仲介・媒介といった緩衝機能が働くことになる。その一方で、宗教の集会や同国人の集まりに参加するなど、⑨保護の働きもある程度保持されている。
留学生活 確立期	大学4年次、研究室に所属することで研究室にいることが多くなる。研究室での日本人学生との付き合いも多いが、また、一方では以前から親しい日本人の家族やクラスメート、留学生の友人（特に留学生会のメンバー）もいるので、研究室の友達とは別に、一緒に遊びに行ったりする。指導教官は自分を日本人学生と同様に厳しく指導してくれるが、語学に関してはもう少し大目に見て欲しい。大学院入学後も同じ研究室に所属。大学院の2年間は財団の奨学金をもらっており、その財団で定期的に行われるパーティに参加することで、日本についての新たな側面を知ることができた。	この時期においては「生活領域」が明確に分化し、本人の側の対処能力向上に伴い勉強・研究領域が中心になるため、周囲からの緩衝機能はほとんど見受けられなくなる。そして本人の①差異軽減がもっとも重要な働きをするようになる。

Table 4 Case 3 (東南アジア、男) の事例と緩衝機能

	事 例	緩 衝 機 能
留学背景 段階	小学1～3年生のときは英語での授業の学校に、その後は公用語での授業の学校に通う。	この段階では緩衝機能を果たすと思われるような事象はほとんど見受けられない。
留学準備期	2年間、母国の日本語学校で勉強する。日本人の先生もいるが、生徒は皆同国人。留学前に、留学先にいる先輩と連絡を取り、日本の生活や大学のことについての情報を得る。	日本語学校での教育および留学先の先輩からの日本の生活や大学に関する情報は⑤動機づけ昂進、⑥能力昂進の働きを持つ。しかしながら、この段階では実際に異文化に接している訳ではないので、日本における日本語学校での留学準備期とは性質がかなり異なっている。
留学初期	アパートや家具などは同国人の先輩に手配してもらった。集団留学ということもあり、同国人の友人がもっとも多く、常に同国人同士のグループで行動する。他国からの留学生や日本人学生との接触はほとんどない。高校時代の親友が日本ではなくアメリカに留学してしまい、ここには親友と呼べる人がいないため、勉強のやる気が出ない。	同国人からの⑨保護、⑩生活支持といった緩衝機能は得られたが、本人の側の③接触志向がみられないと共に、周囲の側の④隔たり感縮小、⑤動機づけ昂進、⑦接触促進といった緩衝機能も不十分なために、ネットワークを広げること、また⑥能力昂進も働かず、本人の側の①差異軽減の機能も十分働くことがない。
留学生生活 確立期	留学生宿舎に住み、同じ宿舎に住む同国人と常にグループで行動する。しかしながら、同国人同士でも特に親しい親友がいるわけではなく、皆がどこかへ遊びに行くときに自分は家に一人であることもあった。アルバイトとして夏祭の練習に参加したときに日本人女性と知り合い、その年の秋に結婚。二人での生活が始まるが、奨学金だけでは賄えないということで、力仕事のアルバイトが多くなる。家庭と仕事中心の生活になり、大学は単位不十分ということで2年間留年した後、退学。	留学生用の宿舎という②差異許容の働く環境で、政府派遣留学生でいる間は安定した生活を送っていたといえる。しかしながら、結婚後は家庭と家庭を維持するための仕事を中心的な生活となり、留学生の本来の目的を達成することが困難になる。

Table 5 Case 6 (東アジア、女) の事例と緩衝機能

	事 例	緩 衝 機 能
留学背景 段階	母国の大学で外国語学部のビジネス英語を専攻。大学3年次に日本の大学の先生と知り合い、日本への留学を勧められた。その先生やその先生の下で勉強をしている日本人学生や留学生が手紙でいろいろと情報をくれて、日本留学の希望が強くなった。	大学の先生や日本の大学の学生からの情報による⑤動機づけ昂進の働きが大きく作用していて、他の緩衝機能はほとんど見受けられない。
留学準備期	留学を勧めてくれた先生が身元保証人となって来て、来日後4ヶ月間、保証人の友人の家にホームステイした。ホストファミリーがいろいろと日本の伝統文化を教えてくれた。日本語学校はとても楽しく、類似文化圏からの留学生と親しくなり、いつも一緒に行動する。また、同国人だけでなく、ヨーロッパや南米からの留学生とも友達になった。	身元保証人やその友人による生活面でのサポートが⑩生活支持の働きをしている。これは私費留学生にとっては特に大きいサポートであるといえる。また、ホストファミリーとの接触を通して、日本語だけでなく日本の文化にも接する機会を得、これが④隔たり感縮小、⑥能力昂進の働きをしている。また、日本語学校という②差異許容の場において日本語を学習する、つまり⑥能力昂進が機能している。
留学初期	4年制大学に編入。奨学金をもらうことができて、経済的に安定した生活。ホストファミリーや日本語学校時代の友人との関係が継続される。アルバイトをしていたので日本人の友人を作る時間がなかったが、4年次の後期になって同じゼミの日本人学生と親しくなった。	奨学金は⑩生活支持の働きをしている。大学外での活動が中心で、勉強・研究領域において緩衝機能がうまく働いていなかったと考えられる。
留学生生活 確立期	他大学の大学院に入学。留学生会の会長を務めたこともあって留学生との交流が多いが、一方では外国語講座を行ったりアルバイトをしたりと、学外の活動が生活の中心となっており、一般の日本人との交流も多く、様々な日本文化を体験した。しかし、ほとんど大学には行っていないため、同じ研究室の学生と親しくなることはなかった。	留学初期と同様、学外での活動が中心となっている。様々な緩衝機能が働いているが、勉強・研究領域においてはほとんど見られない。

Table 6 Case13 (中央アジア、男) の事例と緩衝機能

	事 例	緩 衝 機 能
留学背景 段階	小学校の頃から英語の授業があり、大学ではすべて英語の授業である。さらに学位を取るために留学。	この段階ではほとんど緩衝機能を果たすと思われるような事象は見受けられない。
留学準備期	日本語学校に通う期間はなく、直接大学に入学したために、異文化環境に何の準備もなく飛び込んだような形である。	この時期に最も必要とされる②差異許容や⑥能力昂進の働きも全くないままの入学。
留学初期	国費留学ということで経済的には安定している。アパートなどは大学の留学生担当者が手配してくれた。ボランティアによる日本語教室に通い、チューターが日本での基本的な生活の仕方や日本語を教えてくれた。同じ研究室にいる他国からの留学生と最初に親しくなり、英語でコミュニケーションできるということで、勉強を教えてもらうことも多い。日本人学生でも英語を話せる人と親しくなった。国際交流活動には時々参加し、留学生同士のネットワークはある程度広がるが、日本人との交流はその場限りで終わってしまう。	⑩生活支持、⑥能力昂進など、必要とされる緩衝機能は働いているが、留学準備期に必要とされる周囲の②差異許容の働きがこの時期に重要な役割を果たす。国際交流活動への参加も本来の⑦接触促進と行った働きを十分果たしていないといえる。
留学生生活 確立期	大学、スーパーマーケット、家の間を行き来することがほとんどで、あまり遊ぶことはない。国際交流活動にもたまに参加するが、同国人が少ないし参加しても話す人があまりいないので、本当に興味があるときだけ参加する。同じ研究室の人が研究面で時々サポートしてくれるが、指導教官はほとんど面倒をみてくれない。英語での講義が開講されており、英文の文献を用い、学位論文も英語で書いた。	ほとんど②差異許容の働いている場で生活しているといえる。学位取得という留学の第一目的が強く、日本語や日本の文化は手段的なものとなっている。②差異許容はどの生活場面でも機能しているが、③接触志向、⑦接触促進といった機能はほとんど見受けられない。

この留学生生活確立期にあって、それぞれの「生活領域」のバランスのあり方は、それに対応する「ネットワーク」特性と関わりながら効果的な緩衝機能を促進したり阻害したりすることになる。このことが留学目的の達成や留学生生活上の様々な問題の発生に関連することになる。

考 察

以上のように、留学生の異文化間接触において働く緩衝機能の効果が「時間的経過」に従って「生活領域」「ネットワーク」との対応で異なっていることをみてきた。さらにそれらは相互に関わりがあるものの、留学生生活全体の経過の中では、特に留学準備期における「ネットワーク」のあり方および留学生生活確立期における「生活領域」のあり方が、緩衝機能の効果性と深く関わっていることが明らかになった。

1. 留学準備期における「ネットワーク」の特性と緩衝機能との関連

渡航後しばらくの間は異文化間の落差が大きいと感ずることから mono-net, multi-net における自文化を守る(⑨保護)、あるいは留学生が背景としている文化を許容する(②差異許容)緩衝機能が重要となる。し

かし、その自分の置かれた状況から、その中に留まったままとなる留学生もあれば、初期の段階から bi-net を形成し、接触促進等の機能が十分に働くことによってネットワークを広げ、それによって様々な緩衝機能がバランスを保ちながら効果的に機能している留学生の事例もある。

(a) 同国人同士の集団留学の場合、mono-net が中心となることが多いが、これは特に初期の段階から mono-net が形成され、留学生生活の基盤がそのネットワーク内での⑨保護や⑩生活支持といった緩衝機能によって満たされるためであると考えられる。そのため、受け入れ側である日本人との接触の必要性が薄れ(③差異志向-減、④隔たり感縮小-減)、結果として接触の機会も限られてしまうことになる(⑦接触促進-減)。その後の留学生生活の充実、個人がどのようにして接触機会を得ようとするか(③接触志向)、また周囲がどう異文化接触を促すか(⑤動機づけ昂進)によってかなり異なると考えられる。

(b) 日本人の知人を通しての留学の場合、bi-net が形成されやすいのが特徴である。このような留学の場合は日本人との接触が先行し(⑦接触促進)、それに伴って日本人や日本文化への関心や理解、親近感をもつようになると考えられる。(④隔たり感縮小、⑤動機づけ

昂進、⑥能力昂進)。また、日本人からの日常生活における問題等に関してのサポートも得られやすく (⑩生活支持)、他の留学の場合と比べるとかなり多くの種類の緩衝機能が働いているといえる。そのため、留学生個人の語学力やソーシャル・スキルの上達も比較的早いと考えられる (①差異軽減)。 (b) の場合、日本人との接触 (特に②差異許容の緩衝機能を兼ね備えた日本人との接触) の機会が他の場合と比べてかなり多く与えられているため、留学生個人がその機会をどう生かすかによって、その後の留學生活の充実が異なると考えられる。

(c) 国費留学のような公式なルートでの留学の場合は、(a) の場合ほど mono-net に固まる訳ではないが、multi-net が中心となる傾向がある。これは (a) と (b) の中間型と考えることができる。(b) と同様に multi-net が極端に中心的なものとなると、留學生活の基盤がそのネットワーク内での⑨保護や⑩生活支持といった緩衝機能によって満たされ、受け入れ側である日本人との接触の必要性が薄れ (③接触志向-減、④隔たり感縮小-減)、結果として接触の機会も限られてしまうことになる (⑦接触促進-減)。一方、ボランティア団体による支援や国際交流イベントなどの機会を通して bi-net 形成の場を生かすと、(b) と同様に、日本人や日本文化への関心や理解、親近感をもつようになり (④隔たり感縮小、⑤動機づけ昂進、⑥能力昂進)、インフォーマルな形での接触の機会も得られるようになると考えられる。したがって、(c) の場合は、最初の段階でのフォーマルな形での日本人との接触機会を生かし、またそこで日本人側が②差異許容の場を提供することによって、留學生活の充実度が異なると考えられる。

以上のように、留學初期の段階において、より多くの緩衝機能が働いていることが、その時点での、またその後の留學生活の充実度に深く関わっているといえる。

2. 留學生活確立期において中核となる「生活領域」と緩衝機能との関連

留學生活確立期ではそれぞれの「生活領域」が分化することになるが、この場合、本来の留學目的達成の領域である勉強・研究領域が必ずしも中核的な「生活領域」となっていない事例、あるいは勉強・研究領域にのみに偏り、生活そのものが充実しているとは言い難い事例もある。

家庭関係領域が中心となるのは、⑨保護機能が過剰であると共に、特に⑩生活支持の機能が不十分であるためであるといえる。生活の基盤が不安定であるために③接触志向は低下し、大学での勉強・研究、日本人学生との交流、ボランティア団体や国際交流イベントなども二の次とされる。そのため、ソーシャル・ネットワークも限られたものとなり、さらに家庭関係領域中心の生活となってしまう。

私的活動領域中心となるか勉強・研究領域中心となるかは、本人の目的意識の違いにもよるが、両生活領域において多様な緩衝機能が効果的に働いているか否かによるところも大きい。私的活動領域中心の事例では、留學の第二目的である異文化交流は充実したものとなるが、勉強・研究あるいは学位取得といった第一目的を達成することが困難となる。これは、大学での勉強・研究の場において必ずしも②差異許容、④隔たり感縮小、⑤動機づけ昂進、⑧仲介・媒介といった働きがうまく機能していないために、もとから留学生個人の持っていた③接触志向が低下し、学外での国際交流イベントのような異文化の許容された場 (②差異許容)、自文化に守られた場 (⑨保護) に固執してしまうためであると考えられる。

一方、勉強・研究の事例では、留學の第一目的のみが重要視され、語学力やコミュニケーション・スキルといったもの (①差異軽減) は手段的なものとなり、異文化交流への関心は比較的薄い (③接触志向-低)。勉強・研究の場において、受け入れ側である日本人 (指導教官、学生) がそういった留学生の側のコミュニケーションの困難さなどを受け入れ、許容する体制 (②差異許容) が整っていれば問題にはならないかもしれないが (例えば、指導教官も学生も英語を話すことができるなど)、実際には留学生の側の語学力レベルや学習領域の多様性に十分に対応することは難しい。また、私的活動領域における受け入れ側との交流がほとんどないために、受け入れ側の文化や社会についての理解が偏り、ステレオタイプ化して認識される可能性もある。

以上のように、各「生活領域」における緩衝機能がバランスよく適切に機能していないために、こういった中核的な「生活領域」の偏りが生ずると考えられる。そして、それによって、さらに「ネットワーク」特性やそこで果たされる緩衝機能が異なり、留学生の目的達成や留學生活の充実と関わってくる。

こういった緩衝機能の効果性についてはこれまでも随所で触れてきたが、そのまとめとして、留學生活の全体的な経過として想定された「生活領域」×「ネットワーク」のセットの展開における問題点とそれに対応してとられるべき諸施策について、示唆を与えることとしてまとめたい。

3. 留學生活の「生活領域」×「ネットワーク」セットの展開における問題と今後期待される施策

留學生個々人が留學生活の主要なセットの展開をたどるか否かには、1. 留學準備期におけるネットワーク特性と、2. 留學生活確立期における中心となる生活領域、の2点が影響していることが明らかになった。

1. において、mono-net は自文化の保持や生活支持といった、生活基盤のために重要な緩衝機能の働きはあるけれども、それに固執するか否かは bi-net、multi-net との接触機会の有無とそこでの周囲の対応、そしてそれによって働きかけられた個人の態度によって異なる。特に、集団留學の場合、その両者（接触機会と接触志向）を失いやすいため、留學生個人が積極的に接触機会を得ようとする、そして周囲（特に受け入れ側）が異文化接触を促すことが求められる。とりわけ、初期の段階でのネットワーク形成はその後のネットワーク形成に深く関わっているため、早期において異文化接触を促すことが重要であるといえる。

2. においては、留學生個人の目的意識によるところもあるが、家庭関係領域、私的活動領域に過度に偏る場合、本来の留學目的の達成が困難となる。特に家庭関係領域中心の場合、生活基盤が安定しているか否かということが影響しているために、それをサポートする体制（奨学金、地域のボランティアなどによる）が必要になると考えられる。留學生の大半は家族や親戚など近親者が身近にいない環境で生活しているため、日本人学生の場合以上に生活そのものの安定が重要となる。また、家庭関係領域、私的活動領域に偏る場合、勉強・研究領域での緩衝機能がうまく機能していない場合が多く、受け入れ側の許容的対応が求められる。また一方で、語学力の不十分さ等から日本人学生と対等なものとして扱われないこともあり、そのために留學生個人の達成動機が低下する場合もある。許容的対応が必要であると同時に、日本人学生と対等に勉強・研究のできる環境も求められているといえる。

また、勉強・研究領域に偏る場合には、その領域に

おける受け入れ側の働きかけによって、対人関係を表面的なものに留めず、アカデミックな場における互いの文化の違いを理解し合うことができると考えられる。特にこの領域では留學生個人の高いレベルの語学力が要求されるため、第二目的（異文化交流）を第一目的（勉強・研究、学位取得）の手段として捉え、留學生生活全体の充実を求めることが望まれる。

以上のように、中心的なネットワーク特性や中心的生活領域によって留學生の置かれた状況は様々異なるが、そこでは常に留學生側からの緩衝機能（コミュニケーション能力や異文化接触への動機づけなど）と受け入れ側からの緩衝機能（異文化への許容的対応や異文化接触を促す働きかけ）が相互に影響しながら作用していることがわかる。それらが必ずしもうまく対応しないことによって、異文化間接触が円滑にいかなくなるというが、受け入れ側である我々日本人のできることは、様々な留學生の置かれた状況に合った対応に努めることであり、そのことが日本における今後の異文化交流の進展の基礎となると考えられる。

文 献

- Adler, P. S. 1975 The transitional experience : An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*, Vol.15, No.4, 13-23.
- Bochner, S. 1982 The social psychology of cross-cultural relations. In S. Bochner (ed.), *Culture in Contact : Studies in cross-cultural interaction*. Pergamon Press.5-44
- Bochner, S., McLeod, B. & Lin, A. 1977 Friendship pattern of overseas students : a functional model. *International Journal of Psychology*, 12, 227-294.
- Cohen, S. & Wills, T. A. 1985 Stress, Social Support, and the Buffering Hypothesis. *Psychological Bulletin*, Vol. 98, No. 2, 310-357
- 江淵一公 1987 アメリカにおける留學生問題研究の最近の動向—留學生流入のインパクトの問題を中心として—。広島大学大学教育センター『大学論集』第17集, 23-46.
- Furnham, A. & Bochner, S. 1986 *Culture Shock : Psychological reactions to unfamiliar environments*. ROUTLEDGE.
- 星野命 1980 概説・カルチャーショック。『現代のエスプリ161 : カルチャー・ショック』至文堂。5-30.
- 細越久美子 1996a 留學生の適応過程：「緩衝 (buffering)」の視点から。東北心理学研究, 第46号, 68.
- 細越久美子 1996b 留學生の適応過程：「緩衝 (buffering)」の視点から(2)。日本社会心理学会第27回大会発表論文集, 192-193.
- 細越久美子 1997 留學生の異文化間接触：「緩衝機能」の視点

- からの検討。岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要第6号, 77-85.
- 金沢吉展 1992 異文化とつき合うための心理学。誠信書房。
- 近藤裕 1981 カルチュアショックの心理：異文化とつきあうために。創元社。
- Lisgaard, S. 1995 Adjustment in a foreign society. Norwegian Fulbright guarantees visiting the United States. *International Social Sciences Bulletin*, 7, 45-51
- Oberg, K. 1960 Culture Shock: Adjustment to new cultural environment *Practical Anthropology*. July-August, 177-182.
- 大橋敏子 1991 留学生オリエンテーションの課題—二つの実態調査から。『異文化間教育5』, 49-65.
- Onodera, K. 1996 A study of Mediation in Cross-Cultural Contacts. 岩手大学大学院人文社会科学部研究紀要。第4号, 67-75.
- Scott, W. A. & Scott, R. 1989 *Adaptation of Immigrants: Individual differences and Determinants*. Pergamon Press
- 周玉慧 1993 在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度の試み。社会心理学研究, 第8巻, 第3号, 235-245.
- 田中共子・藤原武弘 1992 在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討。社会心理学研究, 第7巻, 第2号, 92-101.
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫 1992 「異文化間能力」測定の試み。『現代のエスプリ299: 国際化と異文化教育』至文堂。201-214.
- 横田雅弘 1992 在日留学生への異文化オリエンテーション・プログラム。『現代のエスプリ299: 国際化と異文化教育』至文堂。109-117.

注 釈

- 「緩衝」という用語は、既にソーシャル・サポートの研究領域では「ストレス緩衝仮説」(Cohen & Wills, 1985)として、また、留学生や移民などを扱う研究領域の中で「カルチャー・ショック緩衝装置」(同国人集団の機能)(江淵, 1987)あるいは「ストレスに対する社会的緩衝」(オーストラリア移民の研究の中で、家族やエスニック・グループ等のソーシャル・ネットワーク)(Scott & Scott, 1989)として用いられている。しかし、先に述べたような留学生の中間的な立場からみると、文化の差異のショックを和らげるだけでなく、両文化を調整したり自文化を保持するという多様な側面が求められる。従って、本研究では「緩衝機能」をこれまでの「緩衝」という意味よりもさらに包括的に、異文化間の差異の軽減や媒介も含めた働きとして捉える。
- 学生の「生活領域」は一般に、家庭での活動や家族との関係といった家庭関係領域、学校や研究室での学業に携わる場や勉学に励む勉強・研究領域、そしてこれら二つの領域以外で友人との関係を中心とする私的活動領域、の3つの領域に分けることができる。異文化環境で学位を取得する(留学の第一目的)という留学の性質は、ここで分けた3領域の中で勉強・研究領

域というものが中心となる一方で、異文化を多様な形で学習するというもう一つの側面(留学の第二目的)にとって不可欠な私的活動領域等への関わりも重要な意味をもつ。金沢(1992)は、留学生研究にある適応・不適応中心の見方が、主に総体としての心理的な様態を取り上げており、留學生活の中で本来の留學目的に関連する業績達成といった分野が分化して問題とされない傾向があることを指摘している。こうした指摘からも、「生活領域」の区分が必要となる。

3) これは Bochner, McLeord & Lin (1977) による分類で、この3種のネットワークの機能はそれぞれ mono-net は民族的・文化的価値の共有、bi-net は学問的・専門的向上心の促進、multi-net は特定の文化に限定されず、仕事や勉強に関係のない活動のための交際、ということが指摘されている。

4) 異文化適応過程については Lisgaard (1955) の「Uカーブ」仮説や Oberg (1960)、Adler (1975) などの適応段階に関する研究があるが、この段階の区別が明確に区分されていないことや個人差が大きいことから、もっと明確に区分可能な日本留学の経歴を一つの適応段階の区分としてみることにした。日本留学の経歴は様々であるが、概ね Figure 2 に示されるような流れとみることができる。こうした経歴が留学生の適応に基本的な違いをもたらすと考えられるため、本調査の対象者一覧を示した Table 1 では学部入学・母国の日本語学校出身 (Case 1~4)、学部入学・日本の日本語学校出身 (Case 5~8)、大学院入学・日本の日本語学校出身 (Case 9~12)、大学院入学・研究生から入学 (Case 13~17)、の4つに分けて提示している。尚、「時間的経過」は、次のように区分した。i) 留学背景段階：留学決定前までの時期。ii) 留学準備期：留学決定後の準備段階 (オリエンテーションや日本語学校など)。iii) 留学初期：受け入れ側に実際に関わる初期の段階 (研究生や大学学部、大学院の初期)。iv) 留學生活確立期：受け入れ側に関わって約1年以上経過した後の、自分の留学のあり方がある程度確立された段階。

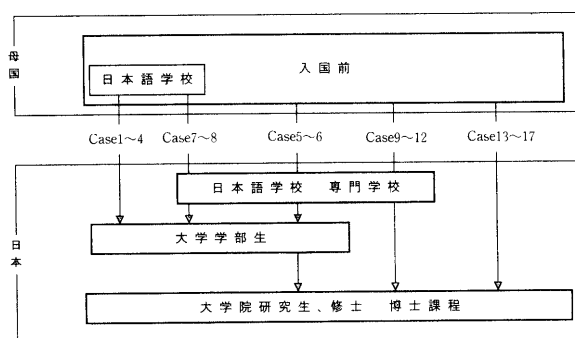


Figure 2 17事例の日本留学の経歴

5) 1996年4月現在の資料によると、地方国立I大学の留学生は126人、そのうち理科系88%、文科系22%となっている。また、経費別留学生の割合は国費(文部省)43%、政府派遣7%、その他(私費)50%という構成になっており、アジア諸国からの留学生が約95%を占めている。

6) 対象とした留学生の個人史については細越(1997)に詳細に報告している。本報告では、紙面の制約上、「時間的経過」「生活領域」「ネットワーク」に関するところのみを取り上げている。